【用語】屋敷割―屋敷地の割振り　出清―出精、よく働くこと　不清―不精、一生懸命やらないこと　入目―費用、入費　請地―開発を請負った土地　阿左見村―新田郡笠懸町

【解説】大間々扇状地内に位置した笠懸野は、寛文年間に幕府代官の岡上景能（おかのぼりかげよし）によって大規模な新田開発が行われ、この時、新たに久々（くぐ）宇・桃頭（ももがしら）・六千石・大原本町・山之神・大久保・権右衛門・溜池の八カ村が誕生したといわれている。その後もこの地域では開発が盛んであったらしく、元禄十年（一六九七）の笠懸野新田絵図には二四カ村の新田が記載されている。大間々扇状地の東端に位置した幕府領の阿左見村でも、時代はやや下るが、宝暦四年（一七五四）原地の開発を願い出て認められた。

この文書は、開発にあたって惣左右衛門ら八人の請負人が取り替わした証文である。内容は、原地を開発するため、まず二一軒分の屋敷割を行い、そのあと請負人が新たな入植者を見つけ出し、そこへ居住させるという計画であった。また他の文書によれば、翌五年に原地の開発用と思われる井戸を共同で掘ることも取り決めている。この結果、宝暦九年八月には、開発した新田や村域を明らかにするため、幕府代官の会田伊右衛門を中心に村内の総検地が実施され、新たに一二三石八斗余が増加した。この増加分にはおそらく宝暦四年以降の開発分も含まれていると思われる。